

国際交流基金日本語国際センター25周年記念シンポジウム

「課題遂行を出発とした言語学習デザイン
— 『まるごと 日本のことばと文化』の挑戦—

セッション3

パネルディスカッション 討論

(サマリー)

日 時： 2015年2月1日

横山紀子（国際交流基金日本語国際センター・教材開発チーム長）：

まず、課題遂行から設計した『まるごと』の意義と課題について、コメントをうかがっていききたい。

投野由紀夫（東京外国語大学大学院教授）：

私たちの英語でやっているプロジェクト（CEFR-J）は、CEFR 的な考え方で Can-do のリストを独自に作っている点で JF スタンド（以下、JFS）と同じである。英語では統計的な手法も用いて語彙や表現形式の整備や Can-do のレベルの整合性の確認など全体的な環境整備をやっているのに対し、基金では『まるごと』というコースブックを先に作りながら、Can-do にはりつくような語彙や文法を具体的に考えていくという意味で、ボトムアップ的にやるか、トップダウン的にやるか、というアプローチの違いなのだと思う。

どちらにせよ、改訂や改善をしていく必要があり、我々のやっている統計的なアプローチが必ずしもいいとは言えない場合もある。そこで長年教えている経験的なカンや教育的な視点がどこか入らないとまずいのではないかということをお互いの間でも話している。

そのため、『まるごと』を作っている実作業からの知見を知るのは非常に意味があると思う。そこから色々な意見を聞きながら、順次改訂してよりよいものを作っていくという意味で大変実りのあるプロジェクトだというのが全体的な印象である。

山内博之（実践女子大学教授）：

試作版を含めると 8 冊に上る、しかもレベルが少しずつ上がっていく『まるごと』の構成は、JFS 準拠という柱があってこそできたものである。それがまず素晴らしい。課題遂行を出発点とすることも、もともと賛成である。

今日の話では「かつどう」を先にやることを推奨しているようだが、「かつどう」と「りかい」のどちらから始めてもよいというスタンスが好ましいと思った。「りかい」から始めたからといって、課題遂行を出発点とした言語学習デザインになっていないとは限らない。語彙や文法が使えるという保証があり、無目的になっていないのであれば、どちらが先でも、それほどこだわらなくていいと思う。また、私は多少大きい魚でもまるごと食べるため『まるごと』というタイトルもすごく好きである。これらがよい点といえる。

気になる点として、『まるごと』は「JFS 準拠」なのか、「CEFR 準拠」といってもいいのではないか、という疑問がある。「JFS 準拠」という意味がどこにあるのかということである。

たとえば「私は、母語はオランダ語だけれども大学は英語で教育を受けているため C2、さらにフランス語は B1 です。そして日本語は『まるごと』を使って学習していて A2 です」とすればすっきりするため、「CEFR 準拠」もけっして悪い話ではない。

やはり語彙や文法が整理されてスタンダードに載っていて、その語彙や文法を使って教材を作って初めてスタンダード準拠といえるのではないかと思う。

横山紀子：

次に、執筆者の立場から見た『まるごと』の意義と課題について、意見を聞きたい。

来嶋洋美（国際交流基金日本語国際センター専任講師）：

『まるごと』という JFS 準拠の教材をゼロから作ることで、単に日本語を教えるだけでなく、一人一人の学習者が求めるものは何か、言葉を使って何をしたいのかなど、具体的な環境を思い起こすようになった。それを教材とするために、既存の知識や資料をもとに選択・配列する作業は、新しい経験であり挑戦であった。

磯村一弘（国際交流基金日本語国際センター専任講師）：

自身の経験と照らし合わせても、課題遂行から出発する外国語学習は大切だと思う。高尾山に登るのにアイゼンは要らないように、まずは目標を決め、それに必要なものを学べばいいのではないか。

藤長かおる（国際交流基金日本語国際センター専任講師副主任）：

課題遂行型で学習を進めることによって、クラスが大きく変わったことを実感している。とくに教室外で日本語使用機会の少ない海外では、クラスの中で楽しくコミュニケーションをとることで、学習意欲も高まっていく。課題遂行を出発点にすることが、コミュニケーションとそれを支える言語項目の学習との有機的なつながりを考えるきっかけになったと感じている。

横山紀子：

JFS には言語素材のレベル別分類がない中、『まるごと』の開発において、言語素材の網羅性やバランスをどのように考えたか。

来嶋洋美：

A（入門・初級）レベルにおいて、「かつどう」では実際の課題遂行に必要な文型だけを採用したが、「りかい」では、より体系的に学習するために関連項目も（場合によって）取り上げた。

磯村一弘：

B(中級)レベルでは、目標となるコミュニケーション活動の Can-do に基づいて、その Can-do の実現に必要な文法を選んだ。そして、その中に A レベルでそれまでに出ていない文法を含めるようにした。語彙は比較的自由度が高く、トピックに必要な語彙をコントロールせずに提出している。また、学習者自身が必要だと思う語彙を調べてメモする「わたしだけのフレーズ」というコーナーも設けている。

来嶋洋美：

語彙には「どのトピックにも使いたい語」と「あるトピックに特有の語」の2種類がある。学習者の使いたい語彙が教科書になれば、調べたり先生に聞いたりするよう勧めている。

横山紀子：

ここで、会場参加者からの質問に答えていきたい。

来嶋洋美：

まず、『まるごと』の対象年齢についてご質問をいただいた。基本的に成人学習者向けの内容となっているが、海外ではいくつかの国で中等教育にも用いられている。飲酒の場面や人生の悩みがテーマになっている部分もあるため、教師が実際に見て判断していただきたい。

また、教師用指導書の有無については、教師用リソースをウェブにて提供している。

「かつどう」「りかい」の両方を使用すべきかという質問に対しては、両方あるいはどちらか一方のみでも使用可能な内容になっている。どのように使うかは、学習者の背景やニーズから判断する必要があると思う。国際交流基金では、「かつどう」と「りかい」を併用する場合は「かつどう」から始めて「りかい」で知識を深めるコース設計を勧めている。『まるごと』は課題遂行重視の教科書であり、日本語が話せるようになるために、まず文脈に沿った談話の音声インプットを先行させるという学習プロセスを重視する。また、様々な交流場面での会話を「かつどう」を通して疑似的に体験し、その後で日本語の文法、文型、語彙などをさらに「りかい」で学ぶことで、文脈と関連づいた言語構造の理解が深まると考えている。

藤長かおる：

「B レベルにおいて相互理解はどうなっているのか」という質問が寄せられている。目標となるコミュニケーション活動の Can-do を選ぶにあたっては、言語による具体的なコミュニケーション活動を通じて、相互理解が深まっていくという点も重視している。たとえば日本人に自分の国のことを聞かれたら情報提供できる、逆に知りたいことを質問できる、相

手の話聞きながらコメントできる、困ったときに交渉できる、こういうことが相互理解につながると考えている。

また、現地の教師が媒介語（学習者の母語）を使用することに関しては、両方の言語や文化を知り、学習者とともに歩んでいく教師の役割の面から、積極的に評価している。

磯村一弘：

レディ・ガガが古くなるのではないかというコメントをいただいた。素材については、歌手、マンガなどはすでに一定の地位を確立していて、10年後にも古く感じないものを意識して選んでいるつもりである。

横山紀子：

それでは最後に、言語教育は今後どのような方向に進んでいくだろうか。25年後を見据えたご意見をうかがいたい。

藤長かおる：

一人一人がもっと自由に、もっと主体的に学ぶことができる環境やリソースを整えていく責任が、私たちにはあるだろう。日本語を学ぶ人達が自分の興味・関心があることについて、自らの考えを言葉で発信できるようになることをサポートしていく必要がある。言語素材についても、課題遂行の観点から整理し直すことが重要だと感じている。

磯村一弘：

日本で短期間での試験合格を目指す学生と、海外で長期的に趣味で学ぶ学習者が、同様の学び方になっている現状は変えるべきだと思う。そのためには、文型積み上げを唯一の教授法とするのではなく、課題遂行型の教え方も含めて学習者に合わせて臨機応変な教え方ができる教師を育てるような教師教育が必要であろう。

来嶋洋美：

自分の人生を豊かにするために学びたいという人たちのコースにおいて、課題遂行のアプローチは非常に有効であり、今後も取り組んでいく価値があると考えている。言語素材についても、従来の言語構造の観点による分類ではなく課題遂行の観点で再構成・再分類していく必要があると思う。

山内博之：

25年後は「スタンダードの時代」になっていけばいいと思う。現在のように教科書と副教材に頼っているのは、日本語教師は弱くなる一方である。よいスタンダードがあり、目の前にいる学生のためのテキストを学期ごとに作ることができる教師が増えれば、学習者は喜

び、教師の地位も向上すると思う。今の JFS には語彙や文法の素材がなく、教材を作ろうと思っても Can-do の活用ぐらいしかできず、基金外の人には JFS を基に教材を作るのは困難。よいスタンダードがあつて、そこからよいテキストがどんどん出ていく。そんなモデルを見せてもらいたいということを一教師として思う。

投野由紀夫：

Council of Europe は CEFR を作ってから、教員研修をはじめテキストやプログラムはすべて各国に任せている。英語の場合、それを出版社が行っている。日本では、国際交流基金が JFS という枠を作り、さらに具体的な教材やコースブックを作り、公的機関による素晴らしい取り組みを進めていると思う。日本のコーパス作りは後発だが非常にいいものを持っているので、コーパス言語学の研究成果を活用して、ぜひ今後 10 年ほどで、よいスタンダードを作ってほしいと思う。

横山紀子：

『まるごと』を十分に検証するのは、これからの仕事である。引き続き、日本語の言語素材の分類、JFS に基づく評価・認定システムの構築といった重要な課題の解決に向けて努力していきたい。

閉会挨拶

村田春文（国際交流基金日本語国際センター副所長）

2005 年の国際ラウンドテーブル開催以来、当センターは JFS の開発に取り組み、『まるごと』の開発や海外の JF 日本語講座の教員研修等を推進してきた。今後も、海外における日本語教育の現状やニーズをよりの確に汲み取り、積極的にチャレンジしていきたい。さらに国内外への情報発信にも力を入れ、国内の日本語教育関係者とのコミュニケーションを通じ、事業のよりよい発展につなげていきたいと考えている。

（了）